
少年と神々

清香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年と神々

【Nコード】

N0806F

【作者名】

清香

【あらすじ】

己の呪いを解き、世界と家族を救うために立ち上がった少年・鬼神。仲間と共にいざ、冒険へ！更新は亀並ですが、どうぞお付き合いください。漢字の読み方は後書きにありますのでどうぞ。【設定について、第1話：始まりを書き直しました！】

第1話：始まり（前書き）

初めての投稿で拙い文ですがよろしくお願いします。

第1話：始まり

時は30XX年。

物語は或る惑星の「地の世界」から始まる。

そこには古より伝わる伝説が語り継がれていた。

天神により身体を奪われし神々

十三の神々は魂となり世界に宿る

宝玉が再会するとき

大神の元

静かなる鐘が鳴り響く

ここからは『少年と神々』の大まかな設定の説明になります。

《プロフィール》

オニガミ
鬼神

- ・16歳の男の子
- ・魔人

- ・魔麗一族
- ・やや楽観的

翔燕 ヒエン

- ・16歳の女の子

・魔人

・魔麗一族

- ・勇ましい(?) 性格

獣狼 ジュウロウ

- ・16歳の男の子

・魔狼

・真獅一族

- ・冷静で義理堅い

主な3人のプロフィールです。

他の登場人物はその都度書きますのでよろしくお願いします。

《一族と族関係》

魔麗 マレイ 一族

- ・鬼神や翔燕の一族
- ・地の世界内の二大一族の一つ
- ・真獅一族などと同盟を結んでいる
- ・吹雪一族とは敵同士

真獅 シンシ 一族

- ・獣狼の一族
- ・あまり大きくはないが戦闘民族である
- ・魔麗一族と同盟を結んでいる

・魔麗一族と暮らしている者が多いが、他の土地に住んでいる者もいる

フフキ 吹雪一族

- ・地の世界内の二大一族の一つ
- ・魔麗一族とは昔から敵同士

その他にも

「華清一族」や

「玄雲一族」などが登場します。

《種族》

魔人

- ・大部分を占める
- ・たくさんの属性があり1人1人特徴がある

魔狼

- ・以前は魔人と同じくらいいたが今は少なくなっている
- ・魔人よりも戦闘能力が高い
- ・特有の
「目」を持ち、レベルがある

龍人

- ・ほとんど謎に包まれている種族
- ・龍と共に暮らしていたと言われている

その他にもたくさんの種族があります。

以上『少年と神々』の登場人物などの設定の説明を終わります。

次回から本文に入るのでどうぞご覧ください！

第2話：呼び出し

「起・き・ろー！」

「む…うるせえ…」

「あ・さ・だー！！！」

「後五分…」

「怨舞族長が呼んでるよー！」

「げげっ！オヤジが！」

魔麗一族の朝。

元気爆発な少女が少年を叩き起こしている。

「だからって耳元で怒鳴るなよ！翔燕！」

「だって鬼神が起きないんだもん！」

どうやら少年が鬼神、少女が翔燕というようだ。2人はまだ騒いでいる。

「ったくよお…まだ朝早いつてのに…」

ブツブツと文句を言う鬼神だが翔燕にはかなわないようで、おとなしく部屋を出て歩き出した。

「鬼神。怨舞族長は忙しいんだからね？」

分かってるの？と少々馬鹿にした様子で翔燕は言った。鬼神は返事の代わりに大欠伸を1つ。翔燕の額に青筋が浮かんだその時、少年が現れた。

「眠そうだな、鬼神！」

「獣狼！」

獣狼と呼ばれた少年 2人よりも大人びている は、興奮した面持ちで話し出した。3人は足早に建物を出る。人影はまばらでうつすらと朝靄が漂っている。

「俺らは族長に呼ばれた…何かワクワクするぜ」

「ん…でもこんなに朝早いのは変じゃない？」

「ふああああ…」

「五月蠅いっ！」

「いてっ！」

3人は小声で話しながらある建物へと入っていった。ようやく朝靄がはれてきたようだ。

「どうする？ノックして入る？」

ドアの前でこそそしている3人。

ジャンケンで負けた奴が最初に入れよ！と、鬼神がふざけたことを言い出した瞬間ドアが開いた。そして恐る恐る部屋をのぞくと四角い結界の中に男が1人。

「ぐずぐずするな。早く入れ。」

低い声とともに微かに殺気が漂う。3人は身震いし部屋へと足を踏み入れた。

「そこから結界の中に入るんだ。」

「「はい……」」

男が手をかざし何かを呟くと結界の一部が消え、鬼神を先頭にぞろぞろと入り男の前に座る。男は小さくため息をついて鬼神を見る。そのため息に何を感じたのか鬼神が口を開いた。

「んで…何の用なんだよ、オヤジ。」

怨舞は答えず、息子である鬼神を小さく睨み、言った。

「針美、そろったぞ」

すると怨舞の横に背の高い女が現れた。

「か、母さん…」

針美は美しい女性だがとても怖い。怨舞の妻、鬼神の母親でもある。そして研究班の副長なのだ。

「待たせてごめんなさいね。ちょっと忙しくて」

その言葉に3人…いや、4人は首を横に振る。かなりの恐妻家らしい。

「では。」

怨舞が針美にアイコンタクトをとると同時に3人は顔を見合わせ、小さく頷く。

「（何か起こったみたいだな…）」

この時の鬼神の勘は当たってしまう運命にある。そしてその勘をはるかに超えてしまう事が起こりつつあるのだった。

第3話・トップシークレット（前書き）

登場人物の名前など、漢字の読み方が分からないという方がいらっしゃるだったので、あとがきに読み方を書きました！

第3話：トップシークレット

「鬼神、翔燕、獣狼：私は忙しい身だ。だから単刀直入に話す。いいな？」

怨舞は「くわしくは針美に聞いてくれ」と、付け足し、3人が予想しなかった できなかつた ことを言った。

「辰乃が、一瞬だが目を覚ましたんだ」

「姉ちゃんが！！！！」

鬼神は驚きと喜びと複雑な感情に突き動かされ立ち上がってしまう。

「静かにしろ、鬼神！」

しかし：叫び、立ち上がってしまうのは無理もない。

姉・辰乃は、今から8年前の春に誘拐され、『闇の世界』に連れ去られていた。その2年後に帰ってきたのだが既に殺人鬼と化していたのだった。

これには16年前のある事件が関係していた。

鬼神達が住むこの世界はこの星の3つの世界のうちの1つ、『地の世界』である。

そして『地の世界』と他の2つの『天の世界』『闇の世界』の狭間には『扉』といわれる封印がしてある。

この封印は決して破られることがないはずだったが何者かにより封印が破られてしまった。

これにより、今迄謎に包まれていたお互いの世界への進出が始まったのだった。

だが、自分の住む世界の空気ではない、他世界の空気を吸うと体に何らかの異常が起きてしまう。早い段階で3つの世界は研究を重ね、在る程度の成果を得る。

しかし実験体がない。

そこで『闇の世界』の何者かが辰乃を誘拐したのだ。

そして悲劇が起こった。体に起こる『異常』は人によって様々らしく、辰乃の場合、脳に影響が出てしまったのだ。

暫くは『闇の世界』で暮らしていた辰乃だが、何故か戻ってきた。殺人衝動に因るものなのかは分かっていない。

これらは魔麗一族研究班が調べ、辰乃の殺人衝動を抑えるのにも役立つっているようだ。

針美が口を開く。

「辰乃が薬の副作用で意識がないのは知っているわね？」

「おう…絶対に起きないってやつだろ？」

鬼神は辰乃について、ある程度は知っているようだ。

翔燕と獣狼は黙って聞いている。

「そうなの。絶対に起きないはずなのに…」

針美は話を続け、3人に事細かく話していく。

だが獣狼が突然言った。

「てことは、オレたち重要な任務を任されるんですか？」

それに続けて翔燕も控え目に口を開く。

「一族のトップシークレットですよ？それを私たちに話すんですから」

そこで結界の中は沈黙が支配者となってしまう。

「…お前らだからこそ、やってほしいんだ。鬼神の呪いも何か関係しているかもしれん。」

『呪い』という言葉に翔燕と獣狼が僅かに反応するが怨舞はそのまま話し続ける。そして、ため息をついてから過酷な任務を言いつけた。

「お前ら3人には旅に出てもらおう。そして『扉』を閉じてくるのだ。」

息をのむ3人。

あまりにも過酷で厳しい任務だった。ましてやまだ16歳の少年と少女なのだ。

だが鬼神はそれを遙かに越えるものを背負っていた。

「オヤジ…母さん…オレまだ呪いの事言っていないんだよ」

「…!!!」

その言葉に怨舞と針美は目を見開く。
翔燕と獣狼も驚き、鬼神を見つめる。

「翔燕、獣狼。オレは姉ちゃんに斬られて呪いにかかったんだ。」

それはまさに驚きという言葉では表せない衝撃だった。
鬼神の『呪い』とは一体何なのだろうか。

第3話：トップシークレット（後書き）

《読み方講座1》
鬼^{オニ}神^{ガミ}、翔^{ヒエ}燕^ン、獣^{ジュ}狼^{ウロウ}、怨^{エン}舞^マ、針^{シン}美^ビ、辰^タ

乃^ツです。 新たな登場人物が出てきたらまた書きます！

第4話：過去の傷跡と任務（前書き）

ほんのちよつと流血（？）シーン有りです。苦手な方はお止めください！

第4話：過去の傷跡と任務

「6年前のこと、知ってるだろ？」

オレが10歳の時、12歳の姉ちゃんが帰ってきた。その時のことだ。

鬼神はそう付け足すと、静かに語りはじめた。

6年前の春。

「たしかここら辺で姉ちゃんが…」

鬼神は姉・辰乃が連れ去られた場所にいた。

もしかしたら、と思い毎日来ていたのだった。

「ガサ…」

直ぐ近くの暗い森から何かが近づいてくる気配がした。

鬼神は既に訓練を開始していたため習ったとおりに短剣を構える。

「ん？」

「おに…が、み…」

何者かが微かに鬼神の名を呼ぶ。だんだんと近づいてくるそれは鬼神のたった一人の姉。

「ねねね姉ちゃん！」

鬼神は突然のことに驚き辰乃に駆け寄る。

「大丈夫か？」

ふらふらしている体をしっかりと支えた鬼神は、そう遠くない一族の地へと向かう。

途中で何度か倒れかけたがなんとか入り口の門までたどり着いた。

「鬼神？ま、まさか…」

「辰乃か！」

2人の門番が鬼神と辰乃に近付こうとした瞬間、鬼神の喉元にはキラリと輝く短剣があった。

「うわっ！」

まだ12歳の少女が弟に刃物を突きつけるなんて有り得ない。

門番の頭にそれが過ぎった瞬間、彼はもはや肉の塊でしかなかった。

一瞬で鬼神から離れ、大人の男を殺した鬼神の元へ戻った辰乃。もはやそれは少女ではなく、殺人の狂気に満ちる魔物。

もう1人の門番は何か呟き、鬼神と辰乃を魔法陣で包み込んだ。

「怨舞さんと呼んでくるから待っている！」

門番はまた何か呟き驚異的なスピードで走り去る。しかし辰乃は笑っていた。

「…あははっ」

意味のある言葉を発することはなく、魔法陣を隠し持っていた長剣で切り捨てる。

そして周りをゆっくりと見渡し突然言った。

「ご、めん…ね…」

その目には涙が。

しかし次の瞬間に顔つきが変わり、鬼神を地面にたたきつけその背中を斬った。

「ぐ、はっ」

そこから鬼神の記憶は朦朧となる。

姉と父親と門番が戦っている。父親が姉を強力な魔法陣で包み込み、泣きながら謝っている。

そして父親が鬼神の名を何回も呼ぶ。

「鬼神！鬼神！お……！！……がみ！

」！

「ってわけだ。オレは何故か生きている。致命傷を負ったはずなのに。」

実は殺された門番は1人ではなく、走って怨舞を呼びに行った門番も死んでいた。

怨舞とともに辰乃と戦い呪いをうけ死んだのだった。

「呪いをつけた門番は死んだ…なのに鬼神は助かった？」

翔燕と獣狼は顔を見合わせた。

鬼神が答えようとするがそれを針美が制する。

「鬼神は自然治癒能力が桁外れに高いのよ。だから助かった…」

しばし無言になる5人。長い長い沈黙の後、怨舞が口を開いた。

「鬼神の呪いはまだ治っていない。いつ暴走するか分からん…だから一刻も早く止めなければいけないのだ。…3人で、謎を解いてくれないか？扉の謎…鬼神の呪い…辰乃…頼む！」

怨舞の必死な頼みで3人の心は決まった。

しかし、本当の決め手は友情、だったのだ。

「オレは鬼神や辰乃さんを救いたい。」

「私も力になりたい。」

翔燕と獣狼は鬼神を見つめる。鬼神が大きく息を吸い言った。

「オレだって死にたくないからな！行くか！」

3人の思いが一つになり若き戦士たちは旅たちの準備を始めることとなった。

3人は一礼し、部屋を出る。

部屋に残された怨舞と針美は顔を見合わせた。

「成長、したな。」

「そうね。」

「…帰ってこいよ、3人とも…。」

「帰ってきますよ、絶対に。」

両親の愛は鬼神に伝わったのだろうか。愛と友情は呪いを越えることが出来るのだろうか。

3人は待ち受ける困難を知りもせず、日々訓練に明け暮れるのであった。

第4話：過去の傷跡と任務（後書き）

遅くなつてすいませんでした。こんな作品ですが読んでくださって
いる皆さんに感謝です！

第5話：新事実発覚（前書き）

少し動き出しました！

第5話：新事実発覚

「どりゃあっ！」

「キンッ！」

「…痛え」

「ふんっ！まだまだ甘いわね！」

呼び出しから3日ほどたった今日。訓練所で鬼神、翔燕、獣狼が任務に向け訓練をしていた。鬼神と翔燕のかけ声やらうめき声が聞こえる。獣狼は彼の父親と剣術のトレーニング中だ。

「2人ともどうだい？」

今日のトレーニングが終わったのか、へたり込んでいる鬼神と仁王立ちをしている翔燕に獣狼が話しかける。

「疲れた…」

「何言ってるのよ！まだまだでしょ！」

「…大変だな」

鬼神は渋々立ち上がり訓練を再開しようとした。その時3人を呼ぶ声が。

「鬼神！翔燕！獣狼！」

「ん？」

3人が振り向くと、そこには針美がいた。
木陰から手招きして3人に用事があるらしい。

「お呼びでしょうか？」

翔燕がまっさきに駆け寄り、3人は針美のいる木陰に入った。そして針美は3人の身体的特徴や、弱点、これからの訓練について話し始めた。

「（休憩できてよかった…ラッキーだぜ。）」

と鬼神がほくそ笑んでいる頃、一族の長老・滝獺、その妻・燕の元へある新事実が報告されていたのだった。

「…燕。」

「はい。」

「驚きじゃな。」

「そうですねえ。」

滝獺と燕は、敵国に放ったスパイからの手紙を読んでいた。

「地の世界」は大小様々な一族・国に分かれており、魔麗一族は今も吹雪一族と争っている。

また一族間の戦いで滅びた国も少なくはない。

魔麗一族では戦争を極力起こさないようにしているが、やられる前にやらないと滅ぶ一方なのだ。今は「地の世界」の中で団結し、「天の世界」「闇の世界」に対抗しなければいけない。そこで鬼神達は「扉」の任務を任された者と同時に「和解の使者」でもあるのだった。

「吹雪からの手紙かと思っていたが…」

「…闇の世界からでしたねえ。」

「うむ…。あの伝説から全てが始まったようじゃの。」

「そうですねえ…。ですがこれらはあの子等に教えない方が宜しいかと」

「…」

何故か、滝獺は答えない。暫く沈黙が続き、静かに言った。

「…この部屋、浄化してあるのか？」

「ええ…どうかしましたか？」

燕の言葉が終わらないうちに滝獺は矢を放った。

「そこだっ！」

鋭い声と共に放たれた矢は一匹の生き物に深々と突き刺さっていた。

「これは…間者…？」

「あまり見かけない奴じゃの…」

2人は微かにもがく生き物を見つめていたがやがてそれは動かなくなってしまうた。

「こいつ…我々の世界の物ではないな…」

「え！？まさか闇の物ですか？」

「ううむ…分らん。」

「とりあえず研究班を呼びましょうか？」

「そうじゃな。」

2人は頷きあつてゆつくりと部屋を出る。

廊下で白衣を着た魔人を呼び止め、研究班へと連絡したところで滝
獠は気付いた。

「まさかとは思うが…」

「何でしょう？」

「他にはいなかっただろうか…」

「…浄めてありましたから大丈夫かと。」

その答えに滝獠は満足そうに頷き、燕と一緒に族長室へと歩いてい
った。

先ほどの部屋の中にはさっきはなかった一枚の灰色の羽が落ちていた。

研究班は気付かなかったのか、その羽は片づけられなかったらしい。

「ふーっ、危なかったなあ…。」

誰もいないはずの部屋に、男の声。すると、その羽は徐々に姿を変え1人の男へ変化したのだ。

「伝説、かあ…。面白そうだね！」

ぶつぶつと呟き、普通の人間にはない大きな灰色の羽を広げ、一瞬で消え去った謎の男。

外には夕焼け空が広がり彼はそこに黒い影を落としながら小さく、小さくなっていった。

一方、訓練所では針美の話が終わり鬼神、翔燕、獣狼の3人は楽しそうに話している。

「あーあ…オレ、頑張ろう！」

「鬼神なんかに負けないわよ！」

「体術を磨くぜ…」

「よっしゃあああ！」

「もちろんサボったら…分かってるよね？」

「「分かりましたっ！」」

得意な物も苦手な物も別だが、心は一つ。目指すべき物は一緒なのだ。

第5話：新事実発覚（後書き）

《読み方講座2》
滝^{ロウカイ}、
燕^{ツバメ}

番外編：プロフィール（前書き）

設定の説明パート2です！

番外編：プロフィール

《プロフィール》

怨舞^{エンマ}

- ・ 40歳の男の人
- ・ 魔人
- ・ 魔麗一族の族長
- ・ 辰乃、鬼神の父

針美^{シンビ}

- ・ 38歳の女の人
- ・ 魔人と龍人の子だが、魔人ということになっている
- ・ 龍人の特徴は能力的にはあまり無い
- ・ 魔麗一族の研究班副班長
- ・ 辰乃、鬼神の母

滝喰^{ロウカイ}

- ・ 65歳の男の人
- ・ 魔人
- ・ 魔麗一族のご意見番
- ・ 鬼神には「じいちゃん」と呼ばれている

燕^{ツバメ}

- ・ 65歳の女の人
- ・ 魔人
- ・ 魔麗一族のご意見番
- ・ 鬼神には

「ばあちゃん」と呼ばれている

辰乃^{タツノ}

- ・ 18歳の女の子
- ・ 魔人
- ・ 魔麗一族
- ・ 10歳の時に闇の世界の何者かに拉致され12歳の春に帰ってきた
- ・ 殺人抑制薬の副作用で眠っている

《種族》

魔人

- ・ 戦闘期間は15～60歳でその期間は肉体的な老化はない（能力があがる等の変化はある）
- ・ 外見的には少しずつ年をとる

魔狼

- ・ 戦闘期間は魔人と大体が同じ
- ・ 目は
- ・ 「三日月型」
- ・ 「半月型」
- ・ 「満月型」があり、幻と言われる
- ・ 「朱月型」も存在するらしい

また、魔人と魔狼の子等異なる種族同士の子孫は様々な面で高い能力を持つ。今は無くなったが、昔はそれをよく思わない者がいて差別的な態度をとられる場合もあった。

《各機関》

研究班

- ・ 魔麗一族にある機関で主に、呪いや他世界、能力について日々研究している
- ・ また、様々な薬なども開発中である
- ・ 辰乃は研究班の建物の地下で眠っている

番外編：プロフィール（後書き）

ちなみに滝獐と燕は鬼神と血縁関係はありません。鬼神君はずいぶんとフレンドリーな呼び方してますね…。（笑）魔麗一族と真獅一族の皆さんは仲が良かったです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0806f/>

少年と神々

2010年10月15日16時06分発行